NUSOM 2026 体験記

名古屋大学医学部医学科 5 年　勝又弘樹

1. 概要

2026 年 7 月 7 日から 13 日までの 1 週間、NUSOM Summer School に参加しました。このサマースクールには、海外協定大学である米国のデューク大学、ノースカロライナ大学チャペルヒル校、ジョンズ・ホプキンス大学、カリフォルニア大学デービス校、そして英国のランカスター大学の医学部学生が参加しました。

今回のプログラムでは「バディ制」という方式が取り入れられ、1 人の海外学生に対して私たち日本人学生が 1〜2 人つき、プログラムを通してともに行動しました。常に隣で交流できたことで、単なる見学の引率ではなく、海外の学生と深く関わり合うことができたのが今回の大きな特徴でした。地域医療を実際に経験できる機会や、医療技術・イノベーションに触れる講義や実習、さらに海外からの学生が日本の伝統や文化に触れる機会もあり、大変充実したプログラムでした。

2. 内容

(1) ラボ見学

初日は、学内の研究室を見学しました。私は公衆衛生のラボを訪問しました。この研究室には海外から来ている学生が多く在籍しており、それぞれの出身国の医療制度について話を聞くことができました。同じ「公衆衛生」という分野でも、国によって前提となる制度や課題が大きく異なることを知り、各国の医療制度への理解を深めるとても良い機会となりました。

(2) Medical xR センター・手術室見学

2 日目は、Medical xR センターや手術室を訪れ、海外学生に対して名古屋大学附属病院を紹介することができました。xR センターでは、バーチャルテクノロジーの体験に加え、腹腔鏡手術の練習や、顕微鏡越しの縫合など、普段はなかなか体験できない実習をさせていただきました。海外の学生は 1 年生が多く、このような手技の機会はまだ限られていたため、いい経験ができたと喜んでいました。

(3) 国立長寿医療研究センター(NCGG)見学

同じく 2 日目には、NCGG の見学にも行くことができました。バーチャル空間を用いた歩行リハビリテーションを見学したほか、講義を通して、日本が直面する高齢化に対して医療がどうあるべきかを学ぶことができました。世界に先駆けて高齢化が進む日本ならではの取り組みを、海外の学生とともに学べたことは、とても意義深い経験でした。

(4) 子ども食堂での活動

私はバディとともに、愛知県名古屋市にある子ども食堂を訪れ、実際に食事提供のお手伝いをしました。ここでは、子ども食堂が地域コミュニティの強化に果たしている役割を学ぶことができました。

印象的だったのは、子ども食堂には子どもだけでなく幅広い年代の方が訪れていたことです。さらに、あえて大々的な広報を行っていないというお話も伺いました。人数に限りがあるため、多くの人が一度に集中してしまうと運営が難しくなること、そして広報を控えることでかえって近所の方々が繰り返し足を運ぶようになり、顔なじみの関係が生まれ、地域のつながりがより強固になっていくということでした。近年はより地域に根差した医療が強調されているため、病院以外で地域を支える活動を体験できたため、大変勉強になりました。

(5) かがやきクリニック・Cam Cam Swallow・文化体験

3・4 日目は、岐阜県美濃市にある医療法人かがやき総合在宅医療クリニックと Cam Cam Swallow を訪れました。

3 日目は、海外の医学生が午前中に在宅医療の見学を行い、私たち名大生は午後から合流しました。美濃市についての説明を受けた後、浴衣を着て市内を散策したり、鵜飼を見学したりと、日本の文化を海外の学生とともに体験しました。夜には温泉を訪れ、海外にはない温泉の文化も味わってもらうことができました。海外の学生たちが日本の伝統文化を心から楽しんでくれている様子が印象的で、案内する私たちにとっても改めて自国の文化の魅力を再認識する時間となりました。

4 日目には Cam Cam Swallow を訪れました。ここは医療機関が運営に携わるカフェで、嚥下障害のある方でも安心して口にできるよう工夫された嚥下食のメニューを提供しています。今回、私たちも実際にその嚥下食をいただきました。驚いたのは、見た目は本物のハンバーグそのものでありながら、嚥下しやすいように作られていたことです。色合いや形も細部までこだわられており、味・見た目ともに完成度が高く、大変感心しました。嚥下がうまくできなくなると QOL が著しく低下してしまいますが、そうした中でも「食事を楽しむ」ことを諦めなくてよいように、どのような工夫がなされているのかを具体的に学ぶことができました。嚥下障害を抱えても食事を楽しめるということは、本当に素晴らしいことだと感じました。

(6) グループディスカッション

このプログラムでは、海外の学生とともにグループディスカッションを行う機会が複数設けられていました。

初日には、医療倫理をテーマに海外の学生とグループになって議論しました。同じ倫理的な問題を前にしても、国や文化によって重視する価値観や考え方が異なることを実感し、海外と日本とで医療倫理の捉え方にどのような違いがあるのかを学ぶことができました。

また、4 日目のかがやきクリニックでは、実際の訪問診療の患者さんの情報をもとに、各バディごとに臨床ディスカッションを行いました。発表準備として疾患名や治療だけではなく、生物学的(Bio)・心理的(Psycho)・社会的(Social)な側面をそれぞれ一つの枠として整理し、大きな紙に書き出し、要素間の関係性を矢印でつなぎながら、患者さんという一人の人間を全体として理解するというものでした。原疾患や合併症、内服薬だけでなく、ご家族の支えや心理的な状態、そして本人が大切にしている「生きがい」までを一枚の地図の上で関連づけていくことで、患者さんの全体像が立体的に見えてくる過程は、非常に学びの多いものでした。

中でも最も印象に残ったのは、患者さんの「生きがい」について考えたことです。私たちのグループが扱った患者さんは、大腿骨骨折をきっかけに廃用症候群を来した高齢の方で、息子さんとの思い出を大切にすることや、ときどき外に出かけることに生きがいを感じておられました。そこで治療やリハビリの目標を痛みを和らげて安全に外出できるようにするなど、その方の生きがいを支えるという視点から設定しました。生きがいは、患者さんが生きる意欲そのものを左右し、時に生きるか死ぬかを分けるほど重要なファクターにもなりうるのだと知り、これまでの私にはなかった新しい視点として大変勉強になりました。

3. 感想

このサマースクールを通して、地域医療や日本の医療について実際に学べたという知識的な面だけでな

く、国境を越えた素晴らしいつながりをつくることができました。今後、このプログラムのように海外の医学生と関わることのできる機会があれば、ぜひ他の学生の皆さんにも積極的に参加してほしいと強く思います。また、かがやきクリニックや子ども食堂、Cam Cam Swallow のように、地域に根差した医療、活動について実際体験させてくださる素敵な取り組みがあることも、多くの人に知ってもらいたいです。

4. 謝辞

今回の課外活動におきまして、貴重な機会をくださいました国際医学教育学の粕谷教授をはじめとした先生方、在宅医療や地域医療を経験させてくださったかがやきクリニックの皆様、Cam Cam Swallow の皆様、子ども食堂の皆様、そしてプログラム中に講義・ご指導をしてくださった先生方に、心より感謝申し上げます。誠にありがとうございました。





